The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	交流の「場」としてのサイバーメディアセンター
Author(s)	村上スミス, アンドリュー
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2013, 14, p. 45-45
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70358
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

交流の「場」としてのサイバーメディアセンター

村上スミス・アンドリュー（言語文化研究科）

大阪外国語大学との統合後、全学の一、二回生が共通教育に来るようになって、豊中キャンパスがさらに学生で溢れるようになった。この学生らが交流する場所として、全学教育推進機構の A 棟・B 棟、豊中学生センター、福利センター学食などの他に、サイバーメディアセンターがある。玄関ホールで学生同士がすれ違い、友人を呼びとめて話したり、公開している CALL 教室で印刷やネット検索をしながら、おしゃべりする。

このような、面と向かっての交流以外にも、サイバーメディアセンターを介してのバーチャルな交流がある。センターの端末を利用してのメールや SNS もそうだが、サイバーメディアセンター独自の「交流」もある。CALL 教室や授業支援システムは学生同士のみならず、学生と教員との交流も実現させる。以下に、サイバーメディアセンターの特徴を生かした外国語の授業を紹介したいと思う。

私が担当する英語ライティングの授業は CALL 教室で行い、CLE という授業支援システムを利用している。教室では、英語アカデミック・ライティングの構文や文体、英文レポートの構成などについてのコンテンツ（ワード文書や PDF ファイル）を画面上に提示し、学生に解説して、次にそれらを応用した練習問題（CLE では小テストの形となる）をさせる。CLE のネット上どこからでも利用できるという利点を生かして宿題を課する。学期の前半は 1 パラグラフ、後半には数パラグラフずつの英文を毎週提出してもらう。宿題は学生たちが一週間のうちの空いた時間に書き、自宅のパソコンなどから、いつでも提出できる。提出してきた英文をこちらで添削して、コメントを添えて学生一人一人にフィードバックする。授業時間内でなくても、学生からの質問を CLE の掲示板で受け付けて、その答えが他の学生の参考にもなる場合には、受講生全員に見られるように公開する。掲示板に毎週一回、必ず英文で何かを投稿することを課すれば英文ツイッターのようになり、学生同士の英語による交流を促すことが出来る。学生が風邪や試合で休んだり、台風で授業が休講になったりしても、学期の最初に設定した日程に沿って練習問題や宿題を CLE でやってもらうことが出来る。このように、学生が全員教室に来られない場合にも、CLE という「場」で授業が進行し学生同士、学生・教員間の交流が叶う。

CALL 教室の機材を使えば、教室内の学生同士をランダムに会話させることや、教員と特定の学生が会話出来、音声によるコミュニケーションも取れるが、私の英語ライティング授業では、上記のような交流は主に文字を介しての交流となる。大学受験向けの英語教育、すなわち、英文読解に重点をおいた英語教育を受けてきた日本人学生特有の英語力を生かす交流だということも指摘したいが、それと共に、ネット時代に合った交流の形でもあるということを強調したい。日本人学生の会話能力、聞き取り能力が劣るとしばしば問題視されるが、ネット上の情報の大部分が画像や文字で提示されていること、SNS などネット上の交流は、主に文字を介しての交流であることを思えば、日本人学生の英語力はネット時代において十分役に立つはずである。

サイバーメディアセンターにおいては、CALL 教室などでの面と向かっての、従来の形の交流に加え、上記のようなバーチャルな交流を生かして、新しい時代で英語が使える阪大生を輩出するような大阪大学の外国語教育への貢献にさらに期待したい。